

# 沖代遺跡 説明会資料

令和5年1月14日(土)

兵庫県教育委員会 / (公財)兵庫県まちづくり技術センター

## はじめに

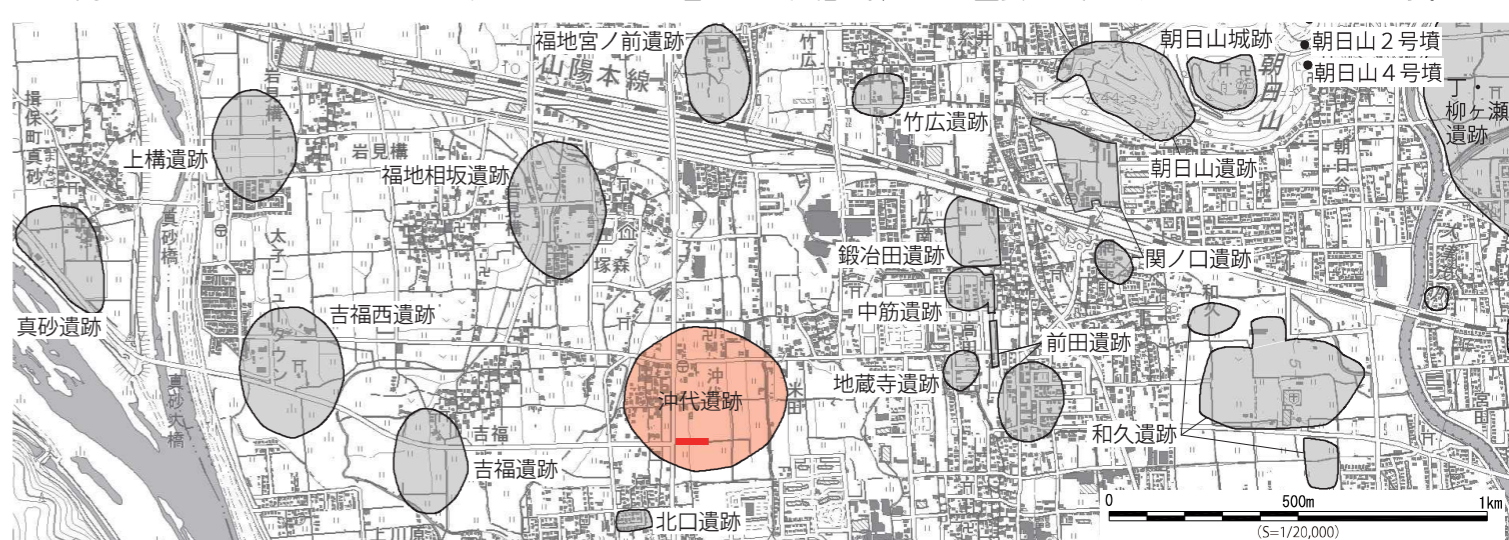
一般県道網干停車場新舞子線建設に伴い、兵庫県教育委員会は(公財)兵庫県まちづくり技術センターに委託して令和4年11月から沖代遺跡の埋蔵文化財発掘調査を実施してきました。その結果、古墳時代中期から後期にかけて(約1,500年前)の竪穴住居跡9棟や溝、土坑、柱穴をはじめとする遺構が確認されました。古墳時代の集落跡からは、朝鮮半島から伝わったカマドのほか、特有の文様(コンパス文)の施された須恵器器台、韓式系土器、滑石製玉類、製塩土器、鞆(ふいご)の羽口など、渡来系の要素や周辺地域との交易品が見られ、沖代遺跡がこの地域において重要な拠点であったことがうかがえます。



発掘調査区の様子(北上空から)

## 沖代遺跡と周辺の遺跡

沖代遺跡で今回確認されたようなまとまった規模の古墳時代集落は周辺にそう多くは発見されていません。沖代遺跡の北東約800mに位置する鍛冶田遺跡や中筋遺跡、前田遺跡の一带に古墳時代集落が広がっていることが、近年の発掘調査成果から明らかになりつつあります。特に、前田遺跡でもコンパス文須恵器器台や滑石製玉類、製塩土器が、鍛冶田遺跡でも韓式系軟質土器や製塩土器が出土していることは、地域内における各遺跡の性格を探る上で重要な証拠を提示していると言えます。



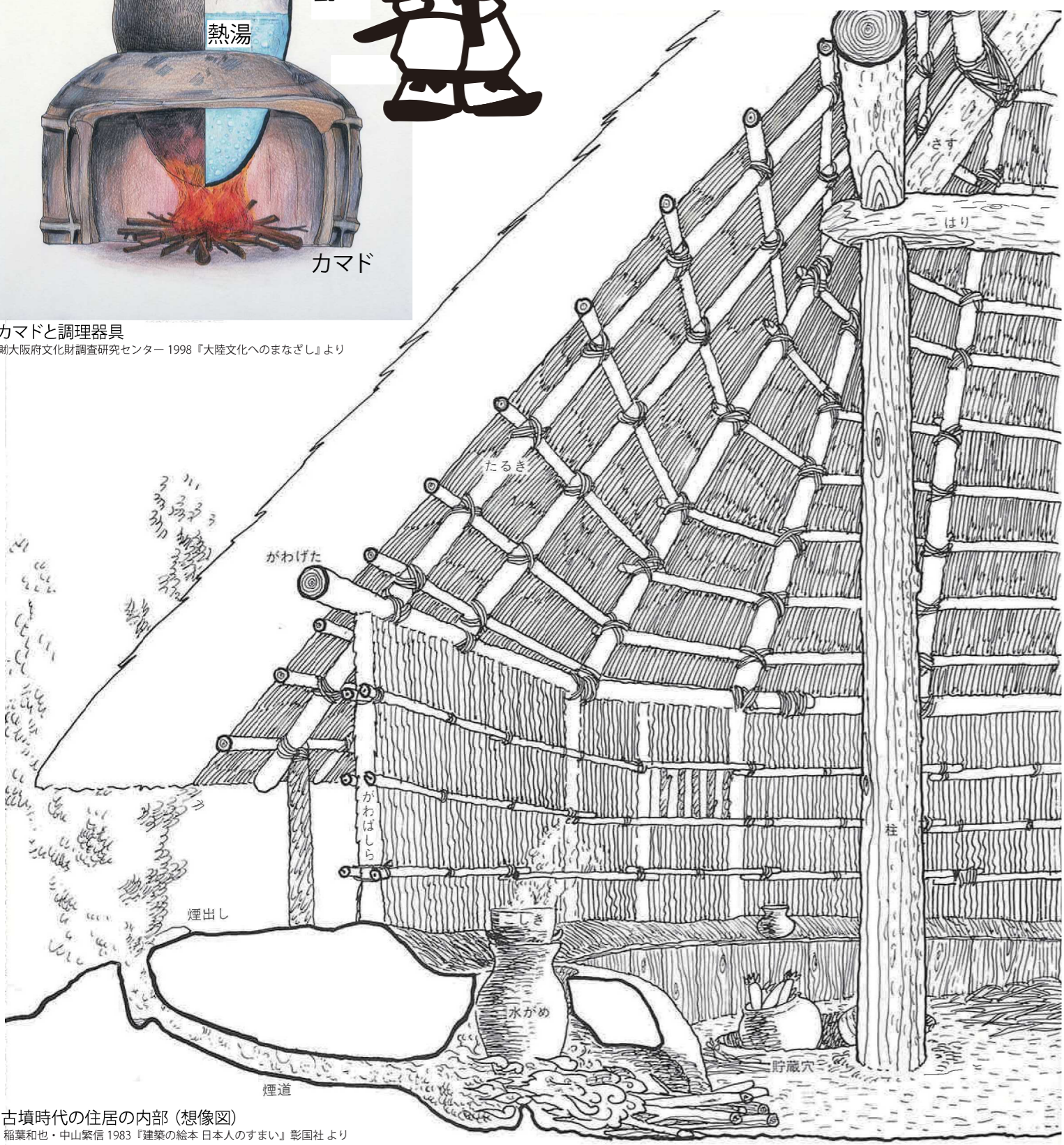
発掘調査区の位置と周辺の遺跡



カマドと調理器具  
財大阪府文化財調査研究センター 1998『大陸文化へのまなざし』より



古墳時代には、お米を蒸して食べていたんだ。底に穴のあいた甑にお米を入れて、その下の甕(鍋)でお湯をわかして蒸気(湯気)でお米を蒸すシステムだよ。カマドは、朝鮮半島からの渡来人がもたらしたキッチンだったんだ。



古墳時代の住居の内部(想像図)  
稲葉和也・中山繁信 1983『建築の絵本 日本人のすまい』彰国社より



**掘立柱建物跡SB1215**  
古墳時代後期から飛鳥時代の側柱建物。柱の掘り方は円形で、主軸方向は他の遺構とは異なります。



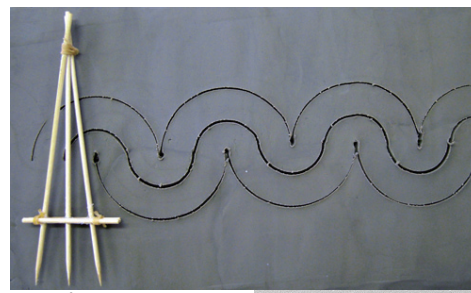
**竪穴住居跡SH1102**  
床面に甌(こしき)の破片が残されていました。柱の掘り方が大きく、柱材を再利用するために抜き取った穴と考えられます。



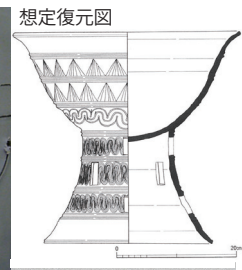
**竪穴住居跡SH1136**  
古墳時代の方形住居跡で主軸は南北方向に近く、北側の2本の柱の掘り方が大きく、柱材を再利用するために抜き取った穴と考えられます。



**竪穴住居跡SH1153**  
溝跡SD1119と平行する主軸方向をもちますが、詳細な時期は不明です。



**コンパス文の施文具と描き方の復元案**



**発掘調査の成果**

古墳時代中期から後期(5世紀中葉~6世紀後葉)にかけての竪穴住居跡や溝跡で構成される集落跡を中心に、それ以降も奈良時代や中世の掘立柱建物跡が見つっています。古墳時代の竪穴住居跡にはカマドが造り付けられるものや、床面には祭祀具である滑石製玉類が、埋土中には製塩土器が見られました。また、溝跡から出土した鞆(ふいご)羽口は鍛冶工房の存在を、コンパス文須恵器器台や韓式系土器もまた渡来系集団とのつながりを想起させるものです。渡来系の要素の存在は遠隔地との交流を示すとともに、沖代遺跡が地域の中で重要な拠点となる役割をもっていたことを私たちに語りかけてくれています。



**竪穴住居跡SH1101**  
古墳時代の方形住居跡で主軸は南北方向に近く、4本の支柱穴で屋根を支え、西壁側中央にカマドがあります。



**溝跡SD1119**  
北東から南西に向かって直線的に伸び、古墳時代中期(5世紀中葉)の初期須恵器や韓式系土器、製塩土器が出土しています。



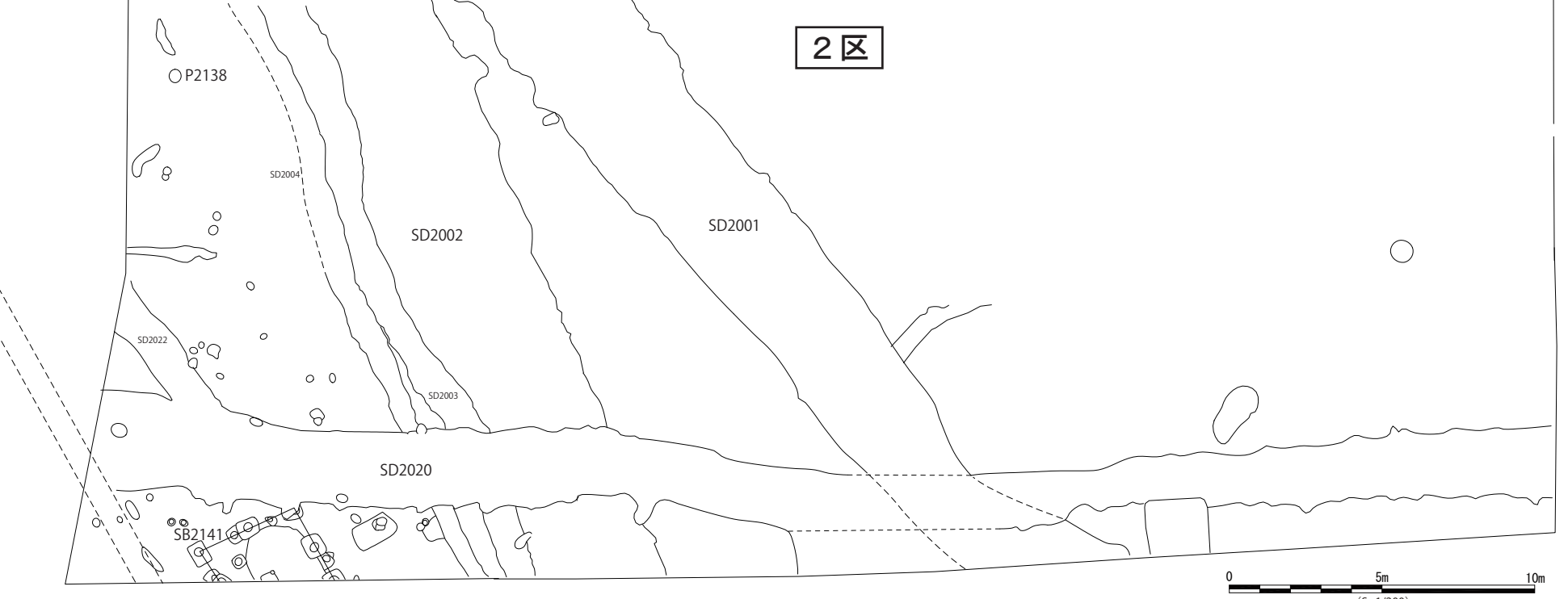
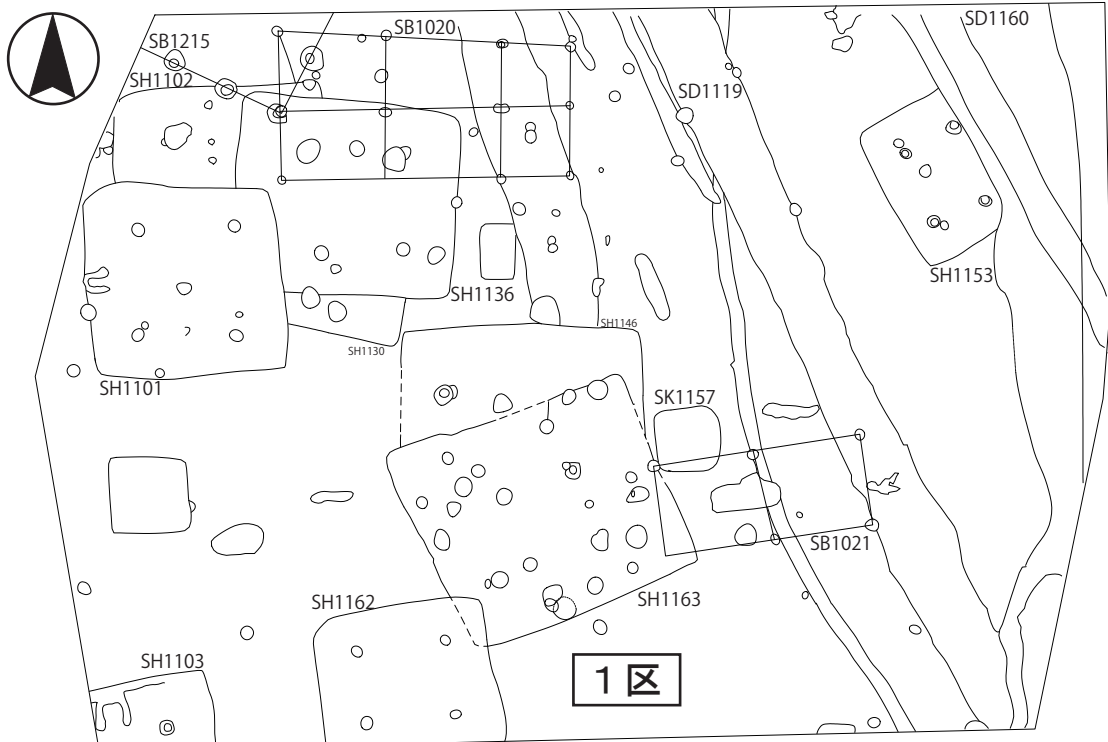
**鞆(ふいご)羽口**  
炉に空気を送るための送風管の先端の破片です。送風管は革袋に装着されて空気が送られました。



**柱穴P2138・弥生土器(甕)**  
弥生時代後期(2世紀頃)の甕が横たっていました。外面には煤(すす)が付着し、煮炊きに使われていました。



**コンパス文の施された須恵器器台**  
3本足のコンパスを用いて半円を上下に反転させながら描いた文様をもつ須恵器。文様の源流は朝鮮半島南部の洛東江下流域にあります。



**竪穴住居跡SH1103**  
古墳時代の方形住居跡が火災に遭った状態で発見されました。炭化した木材は屋根を構成する垂木と考えられます。その上に焼けた粘土が載っていたことから、土葺きの屋根が設けられていた可能性も考えられます。カマドは幅96cmの大型サイズで、土師器の底部が2つ横並びに残置され、床面に立てられた石製の支脚が土師器の底部を突き破っているような状況が観察されます。カマドは二つ掛けタイプの可能性があり、西日本では極めて珍しい発見例です。また、住居に造り付けられたカマドは天井部を中心に使用後に破壊されてしまう例が多く、上部検出時からはっきり袖部が確認できるほど残存状況のよい事例は大変貴重です。



**竪穴住居跡SH1163**  
溝跡SD1119と平行する主軸方向をもち、時期もほぼ同時期(5世紀中葉)です。4本の支柱穴をもちます。



**滑石製勾玉・白玉**  
竪穴住居跡SH1163の床面付近から出土した祭祀具です。



**溝跡SD2002**  
弥生時代後期に開削され、古墳時代後期(6世紀後葉)に幅6mの断面逆台形の形状に掘り直されています。



**溝跡SD2001**  
弥生時代後期の溝で、直線的に伸びますが南端で東側にカーブし、自然流路を人工的に掘り直したようです。



**初期須恵器(左:甌(こしき)・右:鍋)**  
カマドに据えた初期須恵器の調理具のセット。底部に孔のあいた甌に布でくるんだ穀物を入れ、鍋でお湯を沸かし立ち上る蒸気で蒸しました。



**竪穴住居跡SH1162**  
古墳時代集落の中でも比較的後出の古墳時代後期(6世紀後葉)の住居跡です。4本の支柱穴をもちます。



**土坑SK1157**  
弥生時代後期の方形の土坑で、柱穴は見つかりません。床面に鉢の底部と炭化した植物質が薄皮状に残されていました。



**掘立柱建物跡SB2141**  
方形の掘り方(通称:座布団ビット)をもつ奈良時代の倉庫と考えられる建物です。周辺の溝群に近い主軸方向をもちます。



**溝跡SD2020**  
東西方向に直線的に伸びる溝で、平安時代前期(9世紀)の土器が出土しています。



**韓式系軟質土器(甕)**  
韓国からの渡来系集団が伝えた技術により日本で焼かれた甕。器壁の空気を抜くために叩き締められ、平行する溝状の文様が残っています。